

田園交響曲

上野 英信

男は、ますしい舟乗りの長男坊として、瀬戸内海の岸べで生まれた。俺の子にも似あわず、ひよろひよろのつばの弱虫じやと、たくましい赤銅色の親父はこぼした。

父のこぐ転馬舟にゆられながら、男はあかをくみだす桶で、海の水が何杯あるだろうと、へさきの潮をくんでは、どもの海へすてた。麦の手入れをする母の目をぬすんで、虹色のれんげ田にもぐりこみ、しょんべんの出るあなはどこまであるのだろうと、れんげの花の茎を、ちんこのあなにさしこんでみた。

なんにも知らず男はそだつていつた。

戦争がつづいた。

「ジンム・スイゼイ・・・」頭をむちでたたかれながら、それでもやつと天皇の名だけは覚えこんだが、「バクダンサンユーシ・コガレンタインチヨー・・・」のほうは、いくら覚えてふえるばかりで、海の水をかぞえるのと同じように、無限につづいて混乱した。

戦争が大きくなり、男は三十一になつた。

「丙種だらうが氣を落すな」と、検査の前の晩酒をのみながら、大人たちが同情と軽蔑のまじつた顔で、前以てなぐさめてくれた。

男は、炎の海から蝶をのがれさせようとして必死に手をのばした

「丙種だらうが氣を落すな」と、検査の前の晩酒をのみながら、大人たちが同情と軽蔑のまじつた顔で、前以てなぐさめてくれた。

男は、炎の海から蝶をのがれさせようとして必死に手をのばした

男はただ無暗やたらと酒をあふりゲーゲーげろを吐いた。吐きながら男は、むしように恋人がいないことが悲しくなつて、ぼろぼろ涙をながした。

第一乙種合格で男は兵隊にとられた。

船砲兵。

男は、くる日もくる日も、ダンブルの底で酒をくらい、時たま港にあがつては、灯火管制をした女郎屋の、つめたいスフの布団でねむつた。

船は沈んだが、男は泳いだ。

男は、くる日もくる日も、高射砲座のまわりをくるくる廻つて、ただ無暗やたらと広島の空に、鉛色の花をうちあげた。

もう酒ものめず、女郎屋にゆく気もなくなつた。

防空壕のうえに、黄ばんださつま芋が、しきりに薄桃色の花をさせ、広島の夏空は海よりも青く、海よりも深かつた。

八月六日。

朝礼につづいて何よりたいくつな敬礼練習が終り、男は汗をふきふき兵舎に入りかけた。

太陽が音もなく熔けて天いつぱいに拡がつた。

やや間をおいて黄金色の巨大な柱が、目のまえに立つた。千の鉄拳が男の頭をなぐり、男は目がくらんだ。

男は、氣を失いながら、自分が手をひろげてふわりと地をはなれてゆくのを感じた。

男は、まつかな火のなかに、一匹の白い胡蝶が舞いくるうているのを発見した。

が、手はとどかなかつた。

男は、今にも蝶の白い羽に火がつきはしないかと、はははらしながら、アブナイ！ アブナイ！ と叫んだが、声はでなかつた。

炎にもてあそばれながらも、純白の蝶は、燃えもせず、めくるめく真紅の火のなかを、ひらひら舞いつづけた。

戦争が終つた。

やけただれた街を通りぬけ、腐りきつてふくれた裸体が橋杭にひつかかつてゆれている、すみきつた大きな河をわたり、ドームのぬけた広島駅から無蓋貨車にのつて、男は故郷にむかつた。

とおく市街をはなれた中国山脈の峯々が、みわたす限り茶色にこげて沈黙していた。

どんなにむごたらしい屍にも、どんなに堆い屍の山にも、もはや目をそむけることを忘れた男が、はじめてその時瞼をこじた。

しかし、男は、彼の生命がその遠い内部でやけただれていることを、知るよしもなかつた。

泣いていた母親は、生きて帰つた男を、一層はげしく泣いて迎えた。そして、何故かさびしい眉をもつた若い一人の女も……。

男は、その女と、結婚することに決められていた。

男が、のがれられない死を前提として偽りの約束をかためたその女は、男の父が、やがて殺されるであろう我が子のせめて今生の名残りにと探してくれた女だつた。

偽りの戦争が終つたからといって、戦争が結ばせた偽りの約束が消えるわけではない。

夜、男は、家をでた。

夜、男は、さびついた鉄道の枕木をつたつて、炭坑に入つた。

男の心は、坑道よりも暗く、空虚であつた。
しかし、いつの間にかキャップランプの光がきらめいて人間が彼の坑道をくだり、彼の魂につるはしを打ちこんだ。

男は目をさました。
男は旗をたてた。

男は、ここが俺の広島だ、と旗に誓つた。

男は、ここで俺は俺の広島を生きるのだ、と決心した。
男はたたかつた。

男は、たたかれた。

男は、傷つき、倒れた。

人々は、唇で彼の血をぬぐい、みずから皮膚を裂きとつて彼の傷口を蔽い、彼をささえた。

男はたたかいをつづけた。

男はたたかいをつづけた。

そのころ、男は、もう自分の生命が八月六日の火ですつかり絶えようとしていることを知つた。

しかし原爆症という呪われた名で死にたくなかつた。

男はただ、人間が創造するとのできる最も高貴な、平和への愛とたたかいのなかで、生き、そして死にたいと欲した。

苦痛が男を噛む時、劫火のただなかで夢みたあの、火と蝶が、たえず目のまえに甦つた。

男は信じた。燃えきかる真紅の火中を舞いとぶ、あの純白の蝶の生きていく限り、自分は死なないと。

そして男は祈つた。自分の生命にも、その羽があたえられるよう

にと。
そんな時、男は、一人の、大きな目が美しい、女にめぐりあつた。

女は、いつも言葉すくなく、ひかえめに、ほんとうに大切なことだけを、一つか二つ聞くだけだつたけれども、心づかいは、あふれるほど多くのものを男にあたえた。

男は、女を、美しいと思つた。

男は、いつかその女のことばかり思つてゐる時間が多くなつた。しかし、ただ思うだけで、じつと堪えしのんだ。男には、もちろん一円の収入もなければ、十円のたくわえもなかつたから。それでも切なくなつて、男は、土方をしてでもと、二人の一つの生活をねがう夜もあつた。

けれど、そのたびに、闇の奥から、エジプトの詩人の、あの悲しきうたごえが聞えた。

《おとめよ わたしの唇にふれてはいけない……》

男は、死にちかより、とおく女とはなれた。

けれど、そうなればなるほど、男と女の魂は、たがいに身をすりよせて、たがいの内にふかく入つた。

男は、ふたたび生きて帰つてきた。

男と女は、きびしい冬の夜の、ぼた山のふもとで結婚した。

春、女は、男に、受胎したことを告げた。

そして医者が「原爆症でもなあ?」と三度も首をひねつたわと云つて、女はおかしそうに笑いこけた。男もほがらかに笑つた。

しかし、女の腹が大きくなるにつれて、男の不安も大きくなつた。

放射能障害の遺伝について書かれた新聞の、論文や記事が目にふれるたびに、男は暗い予感におびえた。小頭児ができる率が大きいと聞いた夜、男は、恐る恐る女の腹をさすつてみた。しかし、どこが頭やら尻やら、さつぱり見当もつかなかつた。

出産の夜、凍えきつた産院の控室で、男はまるで最後の審判をうけるような気持で、たえまなくおろおろと歩きまわつた。

陣痛はすでに三日づき、女は苦しみに喘いでいた。

そんなことはない、ただの難産だと、男はぐりかえしくりかえし自分に云つて聞かせた。けれどどんなに追いはらおうとしても、男の脳裏に、やけついた當庭に並べて転がされていた無数の被災者たちの、あの醜悪な顔と体が、一人一人、ありありと甦つてき、その姿が次々と自分の子供のそれへと變つていつた。

分娩室の足音がするたびに、今にも目のまえの扉があいて、憎しみに顔をゆがめた医師が、化物のような子供の体を、自分の脚もとにたたきつけはしないかと恐れた。

その子がどう生きてゆけるか……。

その子になんと許しを乞うのか……。

呪われた宿命の俺には、平和を万人のまえに叫ぶより、子を生まないことこそ、ただ一つの、ゆるされた権利ではなかつたか……。

おそい！ もうおそい！

男は、狂おしい自責と後悔にもだえ、苦しんだ。

そして、奇蹟を祈つた。

不意に、うぶごえが、男をうつた。

男は、たちすくみ、がくがくぶるえた。

「うまれましたね、先生、うまれましたね」

女の母が扉にしがみついて叫んだ。

「ええ、立派な男のお子さんです」

壁のむこうで落着いた医師の声が聞えた。女の母は、そのまま床に坐りこみ、手をあわせてむせび泣いた。

うぶごえは、いよいよ高まり、深い夜をひびかせた。

そのたびに、男の背骨が、じーんと鳴つた。

男は、一声ごとに、ぐいぐいと、天にひきあげられた。

男は、天に、慟哭した。

勝つた！ と

いや、勝つたのは、俺ではない。

おまえだ！ あらたな生命よ！

おまえは、戦争をこえる平和の、勝利！

おまえは、人間の愛とたたかいの、かちどき！

扉がひらかれ、看護婦が子供を抱いて、入つてきた。

男は、はつと我にかえり、思わず一步、後にさがつた。

恐怖が、もう一度、男をとらえた。

男は、はつと我にかえり、思わず一步、後にさがつた。

こわごわ目をあげて、男は見た。

やがて、男は女に会つた。

男と女は、黙つてうなづきあい、微笑みあつた。

その微笑みは、男と女が交わすことのできる、最もきよらかで満

ちたりた微笑みであつた。

その瞬間は、男と女が溶けあうことのできる、最もあたたかで満

せな時間であつた。アカシ

男は子供に、朱アカシと名づけた。

男は、心からの祝福をこめて、その子のために音楽を聞かせるこ

とにした。男は貧乏だったから、ほかにどんな祝いをすることもで

きなかつたので。

男は、ためらわず、田園交響曲をえらんだ。

男は、走りまわつて、レコードとプレーヤーを借りた。

ふるいレコードは、針の音をたてて回転した。

「朱よ、聞くがよい。これは、人類の最も不幸であった人が、心

によつて創造した、最も偉大な幸福なのだ。世界で最も苦悩なた

かいをぐぐりぬけた人が、愛によつて創造した、最も高貴な平和な

のだ。まだがれを知らぬおまえの心の耳に、この純粹な《心より

でて心にかえる》真実のしらべをしみこませておくがよい。これが

おまえの、父と母がささげる、せめてもの志だ」

男は、胸の底でこう呼びかけながら、恍惚としてみずからも旋律

に酔つた。

わきかえる魂のしらべは、男に三十年の昨日をふりかえらせ、ま

たこの子とともに出発する無限の明日を仰ぎみさせた。

過去には過去の暦があつたように、未来には未来の暦があるだろ

う。ただ昨日の、あの血ぬられた日付だけは、明日の暦にくりこま

ないようにしてよう。

男は、必死に羽ばたきながら、真紅の火のなかを舞いつづける純

白の胡蝶を、見つめた。

羽もこがさず、この火をぐぐりぬけて舞つているのは、ほかなら

ぬこの子だつたのだ……。

朱よ、おまえはなんという苦しみに堪え、たたかいを生命に変え

て生まれでたことか……。

おまえは、勝利をほこるがよい。

その勝利が、どのような人間の、どのように多くの、力によつて

まもられてきたか、やがておまえは知るだろう……。

その時おまえの、その白い羽が、春をよぶ巨大な風となれ！
しらべは、光と風にみちて、わきつづけた。

男はたしかに見つめていた。

火と蝶を。

真紅の火を舞いくぐつてわたる、数かぎりない純白の蝶のむれを。

【解題】

この作品は、「月刊たかまつ」第四号（一九五七年二月五日発行）掲載のものである。「月刊たかまつ」は、福岡県遠賀郡水巻町の「日炭高松文学・美術サークル協議会」が出したサークル誌で、創刊は一九五六年一月、「文芸誌たかまつ」と名前をかえて五八年三月の第十一号まで続く。水巻町隣りの中間市から「サークル村」が創刊されたのは、五八年九月であった。なお、「日炭高松」は日本炭礦株式会社遠賀礦業所高松坑の略称で、労働組合関係もこの名前で知られる。サークル誌の事務局も、日炭高松労働組合教宣部におかれ、労組から発行への資金援助が出ていた。

炭鉱をはじめとした記録文学で知られる上野英信（一九二三～八七）は、また被爆者でもあった。彼が、「散文詩」のかたちで、自らの出生から長男誕生までを語った「自伝」的作品といえよう。同様の作品は、ほかに見ない（原爆を背後にすえた小説には「黒い朝」があり、「アメリカ人を一人残らずたたき殺すまでは、死んでも死にきれん」という川原一之の評伝中の文言がある。また、原爆について語ったインタビューやには知覧俊郎「筑豊にこだわりつづける」がある）。

（八月六日。朝礼につづいて何よりたいくつな敬礼練習が終り、男は汗をふきふき兵舎に入りかけた。太陽が音もなく熔けて天いつぱい拡

がつた。……」「男は、ここが俺の広島だ……男は、ここで俺は俺の広島を生きるのだ、と決心した。」

上野英信にとって「原点」と呼ぶものがあるとするなら、それは筑豊の炭鉱ではなく、広島原爆であろう。「田園交響曲」というタイトルと違つて、内容は重い。誕生した長男・朱への思いがこめられたものである。初出雑誌発表のまま、ほかに収録・再出されたことはない。

上野朱さんの話によれば、彼が二十歳になった日の夕食の席で、突然「あれを読むのだ」と「月刊たかまつ」を持ち出してきて、この散文詩の上野英信自身による朗読を聞かされたという。朗読している途中で、何度も声をつまらせ、涙も流れてきた。たまたま同席した友人も、この不思議な光景を呆然とした様子で見、聞き入つたらしい。おそらく酒を飲みながらであろうし、妻を横にして「大きな目が美しい、女」「女を、美しいと思つた」の場面では、苦笑いも漏れた。

作者にとって、自らの歩みを振り返るとき、決して忘れるものでない作品でありながら、どこにも再録することはなかつた。その理由は、前記の出来事でも推測されるように、きわめて「私」的な感情に対する恥ずかしさだけであろうか。再録の機会が、単純な要因でなかつたとは思えない。

それにしても、被爆の影響も心配された長男が、無事に二十歳を迎えた祝いと喜びを、二十年前の詩を朗読することで伝えた話は、作品自体の持つ言葉の力に加えて、新たな感動を、私たち読者に与える。上野英信・晴子夫妻、そして、今回この作品の再録と挿話の公開を許していただいた朱さんの持つ人間性をよく伝えるものであろう。